

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02230

研究課題名(和文)油彩画技法「ミッシュテクニク」の東アジアにおける継承と実践に関する調査研究

研究課題名(英文)Research on Succession and Practice of Mischtechnik in East Asian Countries

研究代表者

仏山 輝美 (HOTOKEYAMA, Terumi)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：70315274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：混合技法Mischtechnikは、我が国においては西洋絵画教育の教材もしくは実践的な画法として広く定着しているといえるが、東アジア圏の諸国において同様の継承と実践が認められるとは言い難い。一方、同技法がドイツ語圏において継承され実践されている事例を確認し、それらの処方や実践方法を参照することで我が国において醸成した同技法の検証を試みた。管見の限り、Mischtechnikは、極東の日本とドイツ語圏の一部地域において継承され実践される稀有な技法であるといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

約100年前にデルナーが提案した油彩画の混合技法Mischtechnikが、現在、極東の日本とドイツ語圏の一部地域においてほぼ忠実な処方と継承されており、管見の限りではこの二つの地域においてのみ同技法の継承と実践が認められる。これは美術史および絵画技法史の上でも稀有な現象である。日本におけるMischtechnikの受容に関する研究とその成果は、1970年代以降においても欧州の油彩画技法を貪欲に吸収しようとした我が国の画家たちや美術教育機関関係者による取り組みの検証と再評価である。

研究成果の概要(英文)：“Mischtechnik” (mixed technique) is an established material and/or a practical technique widely introduced in the education of western painting in Japan. However, this is hardly true in other East Asian countries. Cases were studied to find how this technique has been handed down and practiced in German-speaking countries. This set the baseline for formula and practices that were used to review the technique developed in Japan. From the findings of this study, Mischtechnik might be a unique technique in terms of how it has been handed down and practiced limitedly in some German-speaking countries and Japan far apart from Europe.

研究分野：絵画制作

キーワード：Mischtechnik 混合技法 マックス・デルナー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

混合技法 Mischtechnik (本研究ではミッシュテクニクと表記) は、マックス・デルナー (Max Dörner) が唱えた技法上の「仮説」である。本研究の目的は、デルナー著 “Malmaterial und seine Verwendung im Bild” (1921 年) に由来する Mischtechnik が、我が国においてどのような進化と独自の醸成を遂げたのかについて、技法の多様性に着目しながら明らかにすることである。併せて、日本および東アジア諸国における Mischtechnik の由来と継承の経緯を明らかにする。

Mischtechnik は、卵、樹脂、乾性油を混ぜた乳濁液 (エマルジョン) の溶剤を用いて、明暗に基づく形態の描出と油彩絵具の透明な発色を活かした彩色を併用・混合する絵画技法である。明暗法による形態の描写と着色の作業を分けた画法であるともいえる。また、乳濁液の溶剤による速乾性と、油絵具の濃密で透明感のある発色といった両者の長所を活かした混合技法である。溶剤と油絵具 (樹脂絵具) に含まれるダンマル樹脂の性質がそのメカニズムを支えている。

Mischtechnik が、我が国で注目され始めたのは 1970 年代である。1972 年開催の「ウィーン幻想絵画展」(兵庫県立美術館ほか) に出品された ルドルフ・ハウズナー (Rudolf Hausner) と エルンスト・フックス (Ernst Fuchs) の作品にみる Mischtechnik は、当時の多くの日本人にとってはまったく未知の技法であったという。その後、ウィーン幻想派のメンバー〔ハウズナー、フックス、アントン・レームデン (Anton Lehmden)、ヴォルフガング・フッター (Wolfgang Huttter)、アrik・ブラウアー (Arik (Erich) Brauer)〕を追って多くの日本人画家がウィーンに留学し、それぞれに Mischtechnik の処方を持ち帰っている。さらに、1980 年、佐藤一郎 (東京藝術大学名誉教授 (油画技法・材料研究)) が前掲書 (デルナー) を『絵画技術体系』に監訳し、デルナーが提案する同技法を学術的な評価を備えた古典技法として我が国に定着させた。そして、現在、Mischtechnik は、卵テンペラと油絵具を用いた古典的な絵画技法の一つとしても認知されると同時に、層構造として絵画をとらえ明暗と色彩を分けた合理的かつ論理的工程によって描画・造形システムを理解する点で美術教育における絵画技法材料研究のための重要な教材に位置付けられている。

2. 研究の目的

- (1) デルナーが提案した油彩画の混合技法 Mischtechnik が、1980 年代以降日本を拠点に、東アジア圏において西洋絵画教育の教材もしくは実践的な画法として広く定着していったかどうかを明らかにすること。
- (2) 日本において Mischtechnik が伝播・継承された経緯、実践の現状について明らかにすると同時に、関係する画家の系譜を把握すること。
- (3) 日本において Mischtechnik を実践する画家たちの具体的な処方・技法を把握すること。
- (4) 日本における Mischtechnik の現状と特性を検証するべく、同技法をほぼ忠実に継承していると考えられるウィーン、ベルリン、ライプツィヒの画家たちの処方と実践を把握すること。

3. 研究の方法

上記の研究目的 (1) ~ (4) について、主に以下の方法によって研究を進めた。

- (1)

東アジアの美術大学を対象に、Mischtechnik の受容と実践に関する現地調査、ならびに関係者へのインタビュー

日本の美術大学を対象に、Mischtechnik に対する理解状況と教材としての活用状況に関するアンケート調査

(2)

1970 年代以降ウィーン幻想派に学んだ画家たちとの情報交換

前掲書 “Malmaterial und seine Verwendung im Bild” (1921 年) の訳書『絵画技法体系』を監訳した佐藤一郎東京藝術大学名誉教授との交流・インタビュー

1970 年代の我が国における “Malmaterial und seine Verwendung im Bild” の翻訳への取り組みに関する資料の収集

(3)

研究分担者である加藤隆之福岡教育大学准教授と北澤茂夫横浜美術大学教授による卵テンペラと油絵具の混合技法実践（作品制作）とその検証。加藤は、主に Mischtechnik を用いた実践と分析、北澤は卵テンペラと油絵具による併用技法としての画法の実践と分析。

我が国を代表する Mischtechnik の実践者であり、ウィーン幻想派に学んだ画家の一人である長谷川健司氏（東京造形大学・東北工科大学非常勤講師）による同技法の講座を開催（絵画展「UBER WIEN ウィーン幻想派に学んだ画家たち展 2018」のイベント「トークセッション」、筑波大学大学院芸術専攻西洋美術技法演習・集中授業「混合技法」）。

(4)

ウィーン美術アカデミーで絵画技術指導を担うヴォルフガング・マルクス（Wolfgang Marx）氏のもとを訪ね、同アカデミーにおける教材としての Mischtechnik の活用状況、同技法の処方とメカニズムに関する取材、および同技法の意義について意見交換を実施。ベルリン在住の画家姫野慎二氏の協力を得て、Mischtechnik を実践するライブツィヒの画家への直接取材を実施

マルクス氏および姫野氏を筑波大学に招へいし、Mischtechnik 技法ワークショップを実施（研究代表者ならびに研究分担者2名ほかが受講）

4 . 研究成果

(1)

研究代表者仏山が、台湾藝術大学、台湾師範大学、東海大学、彰化師範大学において西洋絵画教育に携わる教員に取材した結果、絵画教育のための教材や実践的な描画技法として Mischtechnik が活用されているとの証言・事例は得られず、台湾において同技法はほぼ受容されていないと判断して良い。

研究分担者加藤は、中国・広西師範大学において Mischtechnik の認知状況に関する取材を行い、デルナーの技法書とともに同技法が中国国内の一部に紹介されていることを確認している。中国において同技法が絵画技法として教材に活用され、実践されているかどうかについては引き続き調査が必要である。

なお、1980年代に日本で Mischtechnik を学び帰国した東アジア圏からの留学生の追跡調査を予定していたが、個人の動向に関する情報が得られず遂行できなかった。

研究分担者加藤は、我が国の美術系大学および教育学部美術科における Mischtechnik の技法講座の実践状況について調査した。集計の結果、回答のあった調査対象校の約60%

(調査対象95校のうち62校から回答があり、そのうちの37校)において同技法が実践されていることが明らかになった。我が国においては、同技法が教育機関における絵画教育の教材としておおむね広く認知されているといえる。

(2)

我が国における Mischtechnik の定着に貢献したと考えられる画家たちを中心に絵画展「ÜBER WIEN ウィーン幻想派に学んだ画家たち展 2018」(2018年7月3日~8月11日、筑波大学アートスペース)を開催し、関連する作品の実見と各作家との交流による情報の収集に取り組んだ。同展の出品者計17名を対象に質問紙によるアンケートを実施し、ウィーン幻想派に学んだ背景や Mischtechnik の習得に至った経緯などについて調査した。また Mischtechnik の実践経験のある対象者には、個々の技法に関する質問についても回答いただいている。日本に継承された Mischtechnik とそれによる絵画作品の表現傾向を分析するとともに、関係者間の交流によって新たな知見を得る機会となった。ウィーン幻想派に関連付けて、我が国における Mischtechnik の画家の系譜を確認できたことは大きな成果であった。「ÜBER WIEN ウィーン幻想派に学んだ画家たち展 2018」の出品作家は次のとおり。出品作家(敬称略):荒牧陽一郎、池越直人、市川伸彦、大山富夫、岡倉聡宏、熊谷宗一、佐藤一郎、末松智、鈴木和道、滝純一、竹富栄治、中嶋祥子、長谷川健司、春口光義、仏山輝美、松田俊哉、宮城真

上記展覧会の関連企画として、佐藤一郎氏と研究代表者仏山によるトークセッションを開催し、佐藤氏がミュンヘンに留学し Mischtechnik を学んだ当時のいきさつや同技法が我が国に紹介され定着していった当時の様子のほか、同技法の本質的な意義等についてお話を伺うことができた。その後、その録音音声をご本人が書き起こされた記録を提供いただき、相互にさらに内容を補完の上、保管している(未発表)。

1970年代、佐藤氏以外の日本の研究者も“Malmaterial und seine Verwendung im Bild”に注目しており、その翻訳に取り組んでいたことを示す資料を収集した。

- 当初の計画では、我が国にウィーン幻想派の作品をいち早く紹介した青木画廊の関係者への取材や、1980年代後半に Mischtechnik の講座を開講した絵画スクール「ヴィーナマルシューレ」について、その活動の貢献と役割を検証する予定であったが当事者への調査を遂行できなかった。

(3)

研究分担者である加藤、北澤は、毎年、卵テンペラと油絵具の混合技法・併用技法の実践として作品を制作し、発表した。また、それぞれ調査や実践に基づく考察を論文にまとめ発表している(後述のとおり)。

上記展覧会「ÜBER WIEN ウィーン幻想派に学んだ画家たち展2018」の関連企画として、長谷川健司氏による技法講座(講演形式)を開催し、同技法のメカニズムや意義について理解を深める機会を得た。教材としてまた画法として実践されている Mischtechnik の合理的なメカニズムを論理的にわかりやすく解説いただいた。また、長谷川氏には、筑波大学大学院芸術専攻の開設科目「西洋美術技法演習」の講師として、入念な考察にもとづく繊細な工夫によって実現された長谷川氏独自の Mischtechnik を具体的な制作実践を通して教授いただいている。

(4)

ヴォルフガング・マルクス氏への取材によって、ウィーン幻想派が輩出したウィーン美術アカデミーにおいても断続的に Mischtechnik が継承されてきたことや、その継承を担

った教員の存在 (Hansjörg Vogelほか) についての証言を得ることができた。マルクス氏は、ウィーン幻想派の一人でありMischtechnikを実践した画家ルドルフ・ハウズナーの助手をかつて務めており、一連の経験を踏まえた知見は本研究における礎であった。姫野慎二氏の多大なご尽力により、ライプツィヒにおけるMischtechnikの継承と実践に関する現地調査を実施し、現代のドイツ語圏における同技法の現況を実見することができた。デルナーがその活動をおこなったドイツ語圏における同技法の実態を把握することで、日本に継承されたMischtechnikの独自性ならびに両者の相違点を見出すことが目的であった。調査の結果、旧東ドイツの画家ヴェルナー・テュプケ (Werner Tübke) が継承し実践したMischtechnikが、ライプツィヒにおいて、彼の教え子たちである2名の画家 (Urich Hachulla, Erich Kissing) によって継承され実践されていることを確認することができた。彼らとの面談でそれぞれの作品と技法について取材し、およそ100年前に提案されたミッシュテクニクが、今もなおドイツ語圏において受け継がれている事例を確認した。また、姫野氏より、テュプケに始まるMischtechnikの画家の系譜図 (案) を提供いただいている。

マルクス氏が修得しているMischtechnikについて学び、そのメカニズムを理解することによって、日本に継承された同技法の現状と特性ならびに両者の相違点を見出すことがワークショップの目的であった。マルクス氏からは、ウィーン美術アカデミーで実践されてきたMischtechnik (現在はカリキュラムに組み込まれていないとのこと) の処方と技法をまとめたテキストを提供いただいている (姫野氏による翻訳。研究代表者ほか保管)。またワークショップでは姫野氏から、彼が実践するMischtechnikの技法材料に関する詳細な知識の提供を受けるとともに、テュプケに始まるMischtechnikを継承する画家の一人マティアス・ルードウィヒ (Mathias Ludwig) が実践する同技法と作品に関する取材の結果を報告いただいた。

結論と今後の展望

混合技法 Mischtechnik は、我が国においては西洋絵画教育の教材もしくは実践的な画法として広く定着しているといえるが、東アジア圏の諸国において同様の継承と実践が認められるとは言い難い。一方、同技法がドイツ語圏において継承され実践されている事例を確認し、それらの処方や実践方法を参照することで我が国において醸成した同技法の検証を試みた。管見の限りでは、Mischtechnik は、極東の日本とドイツ語圏の一部地域において継承され実践される稀有な技法であるといえる。

本研究は、東アジア圏の他国における継承と実践の事例・情報を思うように収集できなかったこともあって、東アジアの一国である日本において Mischtechnik がどのような継承と実践、醸成を遂げたかについて掘り下げる内容に若干傾いていった。これにあわせて、Mischtechnik の発祥の地であるドイツならびに継承の拠点であるウィーンにおける同技法の処方と実践方法を参照し、我が国における同技法のあり様を確認する必要があった。

今後は、引き続き東アジア圏における Mischtechnik の継承と実践の事例を探すとともに、日本とドイツ語圏 (ウィーン、ライプツィヒほか) において Mischtechnik を継ぐ第2世代の画家とその作品について調査し、同技法の系譜の末端をとらえることが課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 北澤茂夫	4. 巻 第9号
2. 論文標題 卵テンペラと油彩の併用・混合技法に関する検証と考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 横浜美術大学教育・研究紀要	6. 最初と最後の頁 67 79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤隆之	4. 巻 51
2. 論文標題 日本における混合技法の継承と実践について-大学美術教育の現場を対象とした調査報告書を中心に-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 137 144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤隆之
2. 発表標題 作品「絡み合いやがてほどけて編み込まれていく日々の営み」2019.6/S100/油彩・テンペラ・綿布・パネル/下絵書きを主とした下層の描画に練り込みテンペラを使用。
3. 学会等名 第6回青木繁記念対象ピエンナーレ/久留米市美術館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤隆之
2. 発表標題 作品「続いていく日々」2019.10/F100 /油彩・テンペラ・綿布・パネル/下描きを主とした下層の描画層に練り込みテンペラを使用。描画部分に混合技法を使用。
3. 学会等名 第73回二紀展/国立新美術館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北澤茂夫
2. 発表標題 「追想」 / 木枠に麻布、前膠、膠+サンシクンド・リンシード+ムードン+チタニウム白による半吸収地、テンペラ+油彩 / 194.0 × 259.0cm
3. 学会等名 第73回二紀展 / 国立新美術館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北澤茂夫
2. 発表標題 「揺らく時」 / 木枠に麻布、前膠、膠+サンシクンド・リンシード+ムードン+チタニウム白による半吸収地、テンペラ+油彩 / 116.7 × 91.0cm
3. 学会等名 令和元年茨城県芸術祭美術展覧会 / 茨城県近代美術館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北澤茂夫
2. 発表標題 作品「夢想の時」 技法・素材：木枠に麻布張り、前膠、チタニウムホホワイト1容量+ムードン<白亜>1容量+膠水1容量+サンシクンド・リンシードオイル1/4容量によるエマルジョンを用いた半吸収地にテンペラによる描画+一部油彩 F150 (181.8cm × 227.3cm)
3. 学会等名 第72回二紀展 (国立新美術館)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北澤茂夫
2. 発表標題 作品「夢想の時」 技法・素材：木枠に麻布張り、前膠、チタニウムホホワイト1容量+ムードン<白亜>1容量+膠水1容量+サンシクンド・リンシードオイル1/4容量によるエマルジョンを用いた半吸収地にテンペラによる描画+一部油彩 F150 (181.8cm × 227.3cm)
3. 学会等名 2018 絵画&彫刻 二紀会選抜台湾展 (国立臺灣藝術大学 國際展覽廳)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤隆之
2. 発表標題 作品「夏の回想」 素材・技法：油彩・テンペラ・綿布・パネル、下描きを主とした下層の描画層に練り込みテンペラを使用 F130 (1940×1303mm)
3. 学会等名 第72回二紀展(国立新美術館)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤隆之
2. 発表標題 作品「日々の編纂」 素材・技法：油彩・テンペラ・綿布・パネル、下描きを主とした下層の描画層に練り込みテンペラを使用 F120 号(1940×1303mm)
3. 学会等名 第14回春季二紀展(東京都美術館)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤隆之
2. 発表標題 描画材作りを通じた色材体験教材の研究-クレヨン作りの実践について-
3. 学会等名 大学美術教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北澤茂夫
2. 発表標題 作品「アリスの時」 技法・素材：テンペラによる下層描き+油彩によるグラッシとテンペラによる描画+油彩による上層描き 木 枠にキャンバス、膠+ムードン+チタニウム白+サンシクンドオイルによる半吸収地 F150号(1818×2273mm)
3. 学会等名 第71回二紀展
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤隆之
2. 発表標題 作品「思考の芽吹きと再生」 技法・素材：混合技法(練り込みテンペラと油彩の併用)、油絵具・テンペラ絵具・綿布・パネル F130号(1940×1620mm)
3. 学会等名 第71回二紀展
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北澤茂夫
2. 発表標題 「天井の園」 木枠に膠カンバス チタニウム白+白亜+膠+サンシクンドリンシードによる半吸収地 テンペラ+油彩(テンペラにより下層描きおよび中描き、その後油彩により上描きおよび仕上げ) F150号
3. 学会等名 第70回二紀展
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 北澤茂夫
2. 発表標題 「雲上にて」 木枠に膠カンバス チタニウム白+白亜+膠+サンシクンドリンシードによる半吸収地 テンペラ+油彩(テンペラにより下層描きおよび中描き、その後油彩により上描きおよび仕上げ) F50号
3. 学会等名 第13回春季二紀展
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤隆之
2. 発表標題 「20歳の境界」油彩・テンペラ・綿布・パネル F130号
3. 学会等名 第70回二紀展
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	北澤 茂夫 (KITAZAWA Shigeo) (10161473)	横浜美術大学・美術学部・教授 (32725)	
研究 分担者	加藤 隆之 (KATOU Takayuki) (70572056)	福岡教育大学・教育学部・准教授 (17101)	